青梅市文化財ニュース　第１４４号

平成１１年１０月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

（青梅市駒木町 1-684 ℡0428-23-6859）

成木地区のバス交通

バスは、大衆の輸送手段として、最も一般的な乗り物である。

自動車の歴史は 1569 年と古いが、内燃機関を言動力とする自動車は、イタリアで、1858 年に発明された。以降、改良されて、現在のような機能が優れた乗り物になった。自動車の一種である乗合バスが最初に走ったのはドイツで、1895 年（明治 28）年のことであった。

日本で最初に乗合バスが走ったのは広島県で、1903 年（明治 36）年のことである。走ったものの、馬車組合の猛烈な反対運動で、すぐに廃止された。東京で最初に走ったのは 1913（大正２）年で、京王電気軌道が新宿－笹塚間を走らせた。

青梅市内では、1927（昭和 2）年に、青梅－飯能を走ったのが最初である。以降、青梅－御岳間、青梅－所沢間などを走るようになった。

成木地区に乗合バスが最初に走ったのは、終戦後の 1947（昭和 22）年秋のことでした。

木崎茂男村長（昭和 22 年３月～26 年３月）は青梅市街地と成木村の中心で、役場が置かれていた落合を結ぶ村営のバスを運行させ、敗戦後の村の発展を図ろうとしたのです。当時は、燃料のガソリンの入手が困難な時代であったため、薪や木炭を燃料とする木炭バスを走らせました。両地区をつなぐ道路としては、明治時代に開通した吹上トンネルはあったものの、トンネルは狭く、両側の道路は急勾配であったため、バスは通行が困難でした。そのため、運行コースは青梅駅前－東青梅から小曽木を通って両郡橋へ向かい、そこから安楽寺の前を通って落合に達していました。ボンネット型式の、30 人前後が乗ると満員になる小さなバスで、馬力も弱かったため、坂道などの運行が困難な所では、乗客はもちろんのこと、近所の人々も協力して後押しをしなければならないような状況でした。その後、ガソリンエンジンのバスが走るようになりましたが、1951（昭和 26）年９月、村営に代わって東京都が成木行きのバスを運営することになりました。運行コースなどは、村営の時と同じでした。

1958（昭和 33）年、東京都に代わって西武バスが運行するようになりましたが、コースは成木７丁目の入平まで延長されました。昭和 30 年４月、成木村は吉野村・小曽木村・三田村と同時に、青梅市と合併しましたが、最後の村長であった木崎鉄一郎村長（昭和 26 年４月～30 年３月）は、合併条件のひとつに、入平地区までバス路線を延長することを挙げていたとも伝え

られています。

最初の「入平」のバス停は、現在の上成木バス亭よりも　100m前後西側にある「高水山登山道」の入口で、当時、そこには角屋（すみや）と称する、小間物やタバコを吸う店がありました。村役場があった落合までは便数も多かったのに比べ、上成木の入平橋までは１日に４便と少なかったが、自家用車がなかった時代だったので、始発から満員の状態でした。そのため、西武バスは道路幅が３m前後と狭いにもかかわらず、大型バスを走らせていました。

昭和 40 年代の中期を過ぎた頃から、成木地区でも自家用車を持っている家庭が次第に増え、一方、バスを利用する人が減少してきたため、西武バスは重荷になってきました。採算が取れないからという理由で、住民の大切な足となっているバスを廃止することも出来ません。

代わって、1975（昭和 50）年４月７日から、再び都営バスの走行となりました。折り返しのバス亭は、現在の上成木バス亭に移され、１日８往復、上成木－富岡－青梅駅－吉野を往復しています。

（文責　角田）